

## 小学生バスケットボール大会

12月7日に飛騨高山ビッグアリーナにて、小学生バスケットボール大会が開催されました。全部で18チームが参加しました。普段はサッカーをしているという男子児童や、剣道をしているという女子児童など、低学年から高学年まで、どの児童も一生懸命ボールを追いかけ、バスケットを楽しみました。バスケット部の中学生も審判などの運営を助けてくれました。



### 編集後記

自分が中学校でバスケット部に入学したとき、同級生は8人いました。その中と同じポジションの子がいて、常にその子を意識して「絶対に負けない! スタメンとる!」と練習していたのを1年生大会を見て思い出しました。今年の1年生大会は、5人そろわない中学校がいくつ

かありました。より多くの子どもにバスケットの面白さに触れてほしいと思うとともに、高山西高校男子の全国大会出場や八村塁といった盛り上がる話題に、バスケットをする子どもが増えてくれたらなと願っています。(S.M)



TAKAYAMA AMATEUR BASKETBALL ASSOCIATION  
飛騨高山のバスケットボールを盛り上げよう!  
編集・発行: 高山市バスケットボール協会 [tabba.jp](http://tabba.jp)

高山市バスケットボール協会は  
賛助会はじめ協会を支えてくださる  
皆様のお力添えをいただきながら、  
地方が疲弊化する中で若者に  
バスケットボールを通じて夢と誇りを持って頂き、  
この地域を支える大きな担い手としての存在を希望しながら  
これからも協会活動に邁進していきます。

ウインターカップに高山西高校男子バスケットボール部が初出場を果たすまでには、たくさんのドラマがありました。そのドラマを一つ紹介します。

## 高山西高校男子バスケットボール部 こじ開けた扉

ウインターカップ岐阜県予選、準決勝。彼の姿はあった。

彼が入学したのは3年前。長身の留学生や県選抜チームに名を連ねた選手が入学した年である。彼は飛騨地区内の中学校に通う選手ではなかった。西高校に決めた当時を、彼はこう振り返る。

「打江先生が僕に声をかけてくれました。打江先生と直接話したことはあまり覚えていないけれど、中学の担任の先生から『とにかく、熱心に声をかけられたぞ。分からないことや知りたいことがあったら何度も来るって』と伝えられたことが一番印象に残っているし、嬉しかったです。」また、こうも言っている。「西高校へ練習に来た時、直感的に『ここだ』と思いました。親は、自分がやりたいところでやれって言ってくれたし、『最後は絶対に自分で決断しなさい』と言われたので自分で西高校に決めました。」

西高校入学後、毎年期待されながらも、結果を出せずに準優勝。盤石の思いで臨んだ3年生の春のインターハイ予選。宿敵を追い詰めるも、最後の最後で勝利は逃げていった。負けてから数週間経っても、とても「切り替えてウインターカップへ向かおう」という気持ちになれなかったという。「あの時が一番辛かったし、落ち込みました。」と振り返る。「引退した方がいいのだろうか。」などとも思ったが、ただ一つぶれなかったものがある。それは「自分で決断する」という親の教えである。担任の先生も言い続けた。「自分で決めたことは自分に返ってくる。後悔しないように。」こうして彼はコートに戻ることを自分に決めた。

ウインターカップに向けての練習が始まり、チームの練習にもさらに熱が入っていった。そんな彼にさらなる試練が舞い込んでくる。夢の実現に向けて第一志望大学の推薦入試と県大会準決勝の日程が重なってしまったのである。チームの大黒柱である彼が当日試合に出られないということになれば、かなりの戦力ダウンになる。もし負けたらそこで否が応でも引退を突き付けられる。だが、大学入試も自分の将来や夢にとって重要なことは言うまでもない。当然大学入試にいかねばいけない。結論は出ていたが決断はできず、彼の心はもやもやしていた。打江先生は彼が試合に出場できないことを想定し、彼が除いたメンバーでの戦術を考え、そのための準備を進めていた。

準決勝の二日前、彼は打江先生にこう申し出た。「試合に行きます。」皆びっくりした。簡単な決断ではない。だが、簡単ではないからこそ彼ならばそう考えるのではとも思えた。さらに一回り結束力の強い集団へとチームへと進化させたのであった。その日の夜、家に電話してそのことを伝えた。自分で決断したその内容を聞いた母親は、「そ



うなんや……。がんばってな。」とだけ言った。「自分で決断したのだから、悔いは残らないだろう……。」親としてはそう考えたに違いないが、息子のこの決断を親として受け入れることはそんなに簡単なものではなかったと推定される。だが、彼を信じているからこそその言葉だったと思う。

準決勝は予想通り接戦であった。相手の守りをかいくぐってシュートをねじ込んだのは彼であった。何とか勝ち切ることができ、いよいよ決勝戦へと駒を進めた。決勝は最後の最後までどちらに転ぶか分からないような展開であったが、最後、勝利の女神は高山西高校に微笑んだ。

ウインターカップ初出場に沸く高山西高校であったが、初戦敗退。全国で勝つことの難しさや厳しさをあらためて感じたのであった。だが、八王子高校相手に戦いきった後の、彼を含めた3年生の顔に涙はなかった。そればかりか、全国大会出場という堅い扉をこじ開けてここまで来たのだという誇りに満ちあふれていた。

### 高山西高校 対 八王子学園八王子高校

21	1Q	21
8	2Q	23
22	3Q	20
13	4Q	13
64		77



## 中学生1年生大会開催!

2月11日に国府中学校にて、高山市と飛騨市の中学1年生が集まって、1年生大会が開催されました。「試合を通して技術の向上や交流を図り、今後の意欲や課題意識につなげる」こと、さらに「指導者も交流を図り、飛騨地区のバスケの強化・普及・発展につなげる」ことを目的としました。始めてまだ1年未満の生徒、普段は試合に出る機会の少ない生徒が精一杯取り組んでいる姿が印象的でした。

### 生徒インタビュー

□自分と同じレベルくらいの人と戦えたことで、競ったプレーがたくさんできて刺激になった。声をたくさん出してたくさん走れたので、2年生との試合でもたくさん声を出して頑張りたい。(1年生男子)

□あまり活躍できなかったのが力不足を感じました。もっと練習してシュート、パスの正確さをあげて、ドリブルをしっかりつけるようにしたいです。でも、リバウンドやルーズボールは頑張れたので良かったです。次は活躍したいです。(1年生女子)

